

四国経済インタビュー

土佐和紙一筋

薄さ0.02ミリの「まわり」神業

日高村の「ひだか和紙有限会社」は伝統の土佐和紙にこだわり続けている。機械すきで「天然繊維製の紙で世界一の薄さ」（県紙産業技術センター）を誇る厚さ0.02ミリの典具帳紙の開発に成功し、近く発売する。工場長の鎮西芳男さん(66)は「新しい発想を織り込みながら伝統を守ってきた」と語る。

(亀岡龍太)

「どういう経緯で土佐和紙とかかわるようになったのですか」

祖父が明治初期に岐阜から伝わった典具帳紙という和紙を手でしていた。典具帳紙は「カゲロウの羽」のように薄く、掛け軸の裏打ち紙やち

ぎり絵などに用いられてきた。水洗いを徹底することで、薄くて粘り強い。漂白し塩素を使わないため、変色しにくい。

祖父は1949年、地元の十数軒で、わが社の前身の輸出典具帳紙協同組合を設立

し、理事長に就任した。私は62年ごろ、祖父に弟子入りし、組合に入った。その後、組合は国の補助を受けて機械を2台導入し、機械すきに変わった。

「薄さを追求するようになった理由は」

2000年ごろには2億円を超えた年間売り上げが、近年の不況で約8千万円に落ち込んだ。それで新たな販路開拓の必要に迫られ、「もっと薄いものがないか」と試行錯誤を重ねるようになった。



薄さ0.02ミリの紙は、重さで言うと1平方メートルあたり2gの紙。手すきだと、同10gが精いっぱいだった。一般的なコピー用紙は同60g台といったところだ。約10年前は機械すきで同7・3gが最も薄かったが、今では同業他社も同5gの紙はすける。我が社は6、7年前に同3・5gの紙を作り、昨秋に同2gの紙発に成功した。

土佐和紙「典具帳紙」を手にする社員ら。右側は世界一薄いとされる「超極薄典具帳紙」日高村

のですか

わが社のオリジナル和紙の開発と販路開拓の計画が07年11月、地域産業資源活用事業計画として四国経済産業局に承認された。それで、昔から取引のある問屋に加え、東京・浅草寺宝蔵門の畔形像など、文化財や古い文書の修復でも使ってもらう機会が増えた。昨年6月には文化財保存修復学会で製品をアピールする機会も得た。照明メーカーからも典具帳紙を使った間接照明が注目されている。

「今後の展開は」

四国経済産業局から承認を得たことで、中小企業では難しかった宣伝費や製品開発の費用、試作品の出展費用などが確保しやすくなり、ユーザーのニーズを幅広くつかめるようになった。今年は外国向けに英語のカタログも計画している。ブランド化を進めつつ、昔からの取引先を大切に、新たな用途も開拓して、不況を乗り切っていきたい。



ひだか和紙有限会社
鎮西 芳男さん

日高村出身。高知高校卒業後、祖父孝枝さんが理事長だった輸出典具帳紙協同組合(高知市)に所属し、和紙の手すきに従事。同組合は1969年から土佐和紙の生産を機械化し、87年に現在の商号に変更した。現在は妻まり子さんが代表取締役、長男寛旨さんが専務取締役。

機械すきでは、原料のコウゾの繊維を溶かし、1本ずつ機械ではらばらにしながら薄くすいていく。その工程で、すき始めとすき終わりに、想定より薄いものができることに気づいた。その条件や機械のバランスを調べ、超極薄の開発につながった。

「販路はどう広がってきた